

「結果を想定してから行動する」という論理の外に飛び出せ

作家の保坂和志のエッセーも面白いが、対談も面白い。最近、『通天閣 新・日本主義発達史』（以下『通天閣』）を上梓した社会学者の酒井隆史との対談（『文学界』12.7）も、当然ながら面白い。面識もない酒井との対談を望んだ理由について保坂はこう述べる。

〈僕は評伝とかその類の本は、読んじゃあ途中でやめの繰り返しでいつも最後までたどり着けないんです。なぜかという、全部を調べ尽くしたうえで、その範囲のなかで整理して、わかったことしか書いていないから。ところが、『通天閣』は書きながら調べて、わからないまま書いているという感じがあった。その先が見えない感じは、因果論でいう「結果を想定してから行動する」という論理の逆の実践で、普通はなかなかそういう書き方はできない。僕自身の小説の書き方もそうなので、これは見ている方向がきっと同じだろうと思ったんです。〉

この評言に対して、酒井が連載の初回から構想が狂いはじめ、〈さまざまなテキストを手当たり次第に読んでいくことで、「違う」ことの意味や膨らみなど、思わぬ発見〉に出会って、〈図書館に行く度、雪だるま式に書きたいことがどんどん増えて、もう迷宮に入ったような感じで……〉と答えると、保坂は、〈いや、でも書いている人が動いている感じがしました。坐って書いているのではなくて、動きながら書いている感じがするんです。体を使って書いていないと、どんどん俯瞰になるでしょう。俯瞰的な言い方や書き方をする人って、なんか座ってふんぞり返ってる感じがする（笑）。〉と、〈動きながら書いている感じ〉を強調する。

保坂の発言でこの間ずっと考えこんできたのは、「結果を想定してから行動する」という論理についてである。私自身、この論理に囚われて生きてきながら、この論理が間違っていることに気づいていたからだ。この論理の錯誤ははっきりしている。「結果を想定してから行動する」ことは、想定する結果に影響される行動を選択する以外になくなるからだ。行動はどうかかわからないその先に踏み込もうとするのに、結果を想定すれば、行動の行き着く先は行動する前からわかったことになってしまう。そうであれば未知に面接している行動はたちまち結果の想定によって既知の行動になり、「結果を想定してから行動する」という論理のなかでしか行動しなくなってしまうだろう。

もちろん、この論理はおかしいだけではない。我々が生きていくうえでの論理の罟を仕掛けていといえる。なぜ、このような論理の罟に陥ってしまうのか。それは人間というものが、想定できるはずのない結果を想定するように考え、生きようとしてきたからである。「結果を想定してから行動する」ことは不可欠であり、有効であることはいうまでもない。しかし、この論理の枠を飛び出して、想定される結果をひっくり返ししながら行動を突出させなければ、現状を打破できないという局面に立たされているのも、想定が及ばない現実の中で生きざるをえない人間である。

たとえば、このようなことをすれば、こうなるに決まっていると大抵の人に思われるだろうことに、十分考えながら覚悟をもって立ち向かったとする。その行為によって確かに想定されたように、仕事はクビになり、刑事処分も食らうことになった。そこまでは想定どおりであり、当人も承知のうえだった。問題はその後であった。クビになれば家族を養うために職探しに追われ、そうなると、職を賭けてまで主張してきたことは持続できなくなり、結局のところ、免職のうえに裁判だけが残っただけで無駄だ、という図式をさらに想定は直線的に描いていく。この想定が描く図式を前にすれば、多くの人が行動する前に「結果を想定してから行動する」という論理に従うのは必至だろう。

だがほんとうに、事態はそのようなストーリーに従って進むだろうか。職探しに追われ、裁判への出頭が続くことになるのは明白だとしても、主張は裁判を通じて持続することによって、免職のうえに消耗な裁判だけが残るという先の図式どおりにはけっしてならないことが起こりうる。想定される結果をひっくり返そうとする行動は当然ながら、想定される結果として現れてくる裁判をもひっくり返す主張として展開されていくからだ。そうすると、想定にはなかった支援者も現れるようになり、

彼らとの関係を築くなかで生活の困窮を上まわる生き活きとした表情で主張は豊かになっていき、勤務していた頃よりも友人も増えて、楽しい日々を充実して送っていることが誰の目にも感じ取れることになれば、そこでは「結果を想定してから行動する」という論理はフィクションでしかないことがさらけだされてしまうだろう。

この論理がフィクションにすぎないのは、人間はフィクションではないからであり、したがって、いくら「結果を想定してから行動」しようとしても、人間は想定どおりに生きることができるようにはなっていないのである。にもかかわらず、人間がこの論理に従って生きようとするのは、生きたいと願うのは、想定されるリスクを回避して安全なレールにしがみつくとことで安心しようとするからだ。もちろん、安全なレールそのものが社会がつくりだしたフィクションだから、そんなものはありえない。別のいいかたをすれば、その安全なレールのすぐ横にぽっかりと大きく口を開けている「ある絶対的な闇」から目を背けて生きようとしているだけのことなのだ。

この論理の有効性とは反対のところでこの論理がダメなのは、安全策ばかりを講じるように促すばかりで人間を現実の懸崖に素っ裸で立たせようとししないからである。そこで人間というものの可能性の極限に人間自身を向き合わせようとししないからだ。ショーン・ペン監督の映画『in to the wild』の主人公の青年がたぶん永遠に忘れられないのは、「結果を想定してから行動する」ことが習性となっている世界を拒絶して、そのとき、そのときに全力を集中して危難を乗り越えなければ生き延びることのできないアラスカの荒野をめざした彼の姿が、人間だけでなく、野生の生き物として生きていく原初の生命のありようをくっきりと映し出しているからである。二十代半ばの实在の彼は毒草を食草と見まちがえて、荒野で独り命を落とすことになるが、短い生涯であったとしても、おそらくもっと生きたかったとしても、荒野に踏み入った彼が何週間か独力でそのとき、そのときを生ききったことは、「結果を想定してから行動する」ことに囚われて生き長らえようとする人の及ばない生の深さであり、彼にとって本望であったろうという思いを馳せてみたくなる。

彼が我々に突きつけていたのは、経済的な生活基盤を確保するなかで生きていこうとすることではなく、生きるなかでその都度、その都度生存のために最善を尽くしていくことであったと思われる。パンをめざす生き方はパンに囲われて、自分がやらなくてはならない、やることを探しつづける旅を次第に忘れさせていくが、本当はなにかをしながら、しなければならぬなにかを優先しながら、パンがその日、その日に目の前に現れてくるというように、食いつないでいくこともできるのではないか。かつての人類がそうして生き延びてきたような生き方を思い起こしてもよいのではないか。

保坂と酒井の冒頭の対談に戻ると、保坂は生きていくことがそうであるように、書くこともまた「結果を想定してから行動する」ような書き方をしていけば、〈全部を調べ尽くしたうえで、その範囲のなかで整理して、わかったことしか書いていない〉ということになるから、最後まで読み進めることはできない、つまり、読む気がしないと云っているのだ。このような論理で書き進める作者は生き方も同じ論理に貫かれていると推測される。なぜなら、書き方を貫く発想は生き方をも貫くと思われるからだ。なぜ酒井の『通天閣』に興味を覚えたかといえば、〈書きながら調べて、わからないまま書いているという感じがあった〉からだ、と述べている。調べるのが先にあって、書くことが後ではないだろう、書き進めるなかで調べなければならなくなってくるのではないか、ということだ。書くことが資料を必要とするのであり、資料にその枠内で書かされているようじゃダメだ。

書くことが先だ、は、行動が先だ、であり、資料の範囲内で書くことは、結果を想定する範囲内で行動することに対応している。『通天閣』が〈わからないまま書いている〉ということは、もちろん、わからないから書いているということであり、わかって書いているなら、少なくとも作者にとって書く意味はなくなるから、読者も作者がわかっていることを読まされているだけになり、当然作者の手の中で転がされて面白く感じるはずがない。作者のわからなさを読者も共有したいのであり、作者が立ちつくしたわからなさの前で読者も一緒に立ちつくしたいのに、作者は読者をわかった方向に誘導するばかりなので、保坂も指摘するように、〈どんどん俯瞰にな〉って、〈なんか座ってふんぞり返ってる感じ〉がしてきて、そのことに気づく読者は途中で本を放り出すことになるのだ。